

〔原著〕

看護学士課程における「働くことに関わる」教育の基盤となる考え方の検討 —ある看護学士課程における現状と意見交換から—

梅津 美香

A Study on Fundamental Concepts of Nursing Education Focusing on Working; Through the Current Situation of a Bachelor's Program in Nursing and Exchange of Opinions

Mika Umezu

要旨

本研究は、ある看護学士課程における「働くことに関わる」教育の現状を把握し、看護系大学教員との現状を素材とした意見交換を通じて、看護学士課程における「働くことに関わる」教育の基盤となる考え方を検討することを目的とした。

A看護大学教員14人にインタビューを実施し、「働くことに関わる」教育の内容・時期・方法を整理した。結果を素材に他の看護系大学の教員3人と意見交換を行った。

「働くことに関わる」教育は、4つの教育内容【人間にとって働くことの意味】【ケア対象者の健康との関連からみた働くこと】【ケア対象者の抱える健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法】【看護専門職として働くこと】から構成されていた。他の看護系大学の教員からは、対象が働くことを援助することと看護専門職として働くことの双方の教育の必要性、【人間にとって働くことの意味】の教育は看護学に限らず学習する内容である等の指摘があった。

結果から、基盤となる考え方を下記の通り整理した。

1. 「働くことに関わる」教育は、【人間にとって働くことの意味】【健康との関連からみた働くこと】【健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法】【看護専門職として働くこと】から構成され、学習の進展とともに各内容が関連して深化する。
2. 働くことを支える制度・しきみの重視、働くことのイメージ化、働く場の理解、看護専門職として働くことへの適応の促進、以上を意図した教育方法の工夫を行う。
3. 【人間にとって働くことの意味】は、看護専門科目以外の科目においても教育が行われる。
4. 学生が対象の働くことの意味を理解し「働くことに関わる」看護ケアニーズをとらえ援助することと、看護専門職として働くことを連動して学べることが重要であり、教員には働くという概念を基本にこれらを統合できるように支援する役割がある。

キーワード：働くこと、教育、看護学士課程

I. はじめに

働くことの意味や価値は一人一人異なるが、その人が

望む生活や生き方の実現には働くことは大きく影響する。

労働に起因する事故や健康障害を予防し安全で健康に働

くことは、個人にとっても集団にとっても重要である。また、健康障害による働くことへの影響は様々なところに及ぶ。例えば、疾病や治療のために休業した患者の多くは、復職の困難さ、健康と仕事のバランスの不確かさ等を経験しており患者自身の判断や努力が適切に行われるための支援を必要としている（梅津ら, 2002）。しかし、医療機関の看護職者対象の調査によれば、約7割の看護職者が患者の復職支援に関心をもち役割だととらえているが、復職支援の具体的援助方法がわからない等の状況があり実施しているのは2割に過ぎない（梅津ら, 2005）。一方で看護職者も働く一人の人間である。新卒看護職の3割が「就職前に考えていた看護の仕事とのギャップが大きい」という悩みを抱えているとの報告があり（社団法人日本看護協会中央ナースセンター, 2006）、看護専門職として働くことを就業時には具体的にイメージできていないことが推測される。さらにこの報告では、働くことへの適応に関連して心身の健康管理の重要性について言及している。

このように、働くという営みを含めた社会的存在としての人間を理解し援助すること、および自らが看護専門職として働くことをマネジメントすることは、いかなる看護の領域においても求められている。看護学士課程ではこのような人材を育成することが期待されており、その教育には多彩で多岐にわたる内容が含まれると考えられる。

看護基礎教育においては、後藤ら（2008）は1年次の産業看護の授業の結果、学生は働く人の健康を考えたサポート的な役割や企業の発展との関わり等の産業看護の具体的なイメージをもった、逸見（2009）は成人看護学概論の授業により学生が身体面、心理面、社会面における働くことに関連する様々な健康問題をとらえていたと述べている。藤原ら（2008）や上野ら（2002）は、成人看護や産業看護の授業において、生活や健康と労働の関連の理解には仕事の見学や働く人へのインタビューは効果的であったと報告している。吉田ら（2006）は、基礎看護実習の学生はヘンダーソンの基本的看護の構成要素のうち「仕事・達成感」のアセスメントは不十分で問題抽出にいたらなかったと述べているが、矢吹（2008）は、精神障害者のための就労支援施設での実習では社会参加・就労に向けた現状と課題の学びとともに労働に対す

る視野の広がりがあったと報告している。産業看護（保健）実習は、労働者の健康問題や支援方法、労働の場における看護職の役割、労働環境を学ぶ機会になっている（福岡ら, 2009；中谷ら, 2010；上平ら, 2013；梅津ら, 2007）。ただし鎌田（2012）が行った調査によれば、産業看護実習は保健師教育機関の約半数しか実施していないという現状がある。

看護専門職として働くことをマネジメントするという点からは、職業的アイデンティティや看護職イメージは教育課程の進行とともに形成され、特に実習の影響は大きい（宮脇ら, 2008；岡本ら, 2005；山内ら, 2009）。佐居ら（2007）は新卒看護師のリアリティショックを軽減するための基礎教育における臨地実習に必要な要素を明らかにしている。また、基礎教育課程での看護職者の職業性曝露予防教育の実施状況は、一部の危険因子については十分ではないとの指摘がある（小稗ら, 2008；土屋, 2007）。

以上のような報告はあるものの、働くという営みを人の生涯の中での営みとして広くとらえ、看護学士課程教育全体を俯瞰し、働くことに関して何を、いつ、どのように教育していくのか、といった観点で書かれた研究論文を見出すことはできず、看護学士課程における「働くことに関わる」教育の充実に向けて内容、時期、方法、組立について基盤となる考え方を整理する必要性があると思われた。そのためには、既存の文献等には示されていない教育内容等がある程度存在する可能性も考慮し、実際に看護学士課程で行われている「働くことに関わる」教育を新たに把握する必要がある。しかし、多彩で多岐にわたる「働くことに関わる」内容が各看護系大学の教育方針や教育課程の特徴に基づいて配置されているとすれば、複数の大学の教育の現状から共通性等を検討するよりも、教育課程の特徴を踏まえて体系的に一つの看護学士課程を対象に教育の現状を把握し、それらを素材に異なる立場の経験豊富な看護学教育研究者との意見交換を通じて妥当性を検討することから基盤となる考え方を整えていくことが重要であると考えた。

本研究においては、ある看護学士課程における「働くことに関わる」教育の現状を教員からの聞き取りにより把握し、その結果を素材に看護系大学教員と意見交換を行い「働くことに関わる」教育の基盤となる考え方を検

討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 看護学士課程における「働くことに関わる」教育の現状把握

1) 対象となった看護学士課程の特徴の把握

教育課程の特徴を踏まえて体系的に「働くことに関わる」教育の現状を把握する必要性から、筆者が教員として所属するA看護大学（以下、A大学）の学士課程教育を対象とした。A大学の教育課程の特徴の把握のために、「大学案内」「学生便覧」「シラバス」「大学ホームページ」から教育理念、教育目標、教育課程の構成、教員構成を確認した。

2) 教員へのインタビュー調査

看護専門科目について事前にシラバスの記載を確認した上で、4領域を代表する各教授に対し個別インタビューを行い、必要があった場合には2人目の教授にインタビューを実施するという方法を取り結果的に6人の教授が対象となった。これらのインタビューでは具体的な教育内容を把握できなかった一部の科目について、科目の単位認定者である教員7人に追加インタビューした。インタビューでは当該看護学領域および担当する看護専門科目において教えている内容と意図、方法を尋ねた。聞き取った内容は、教育上の意図、教育内容、教育方法という点から整理し、筆者自身が単位認定している科目については、上記に準じて記述しデータとした。

科目ごとに整理した結果をA大学の「働くことに関わる」教育の現状の一覧表として作成し、インタビュー対象の教員14人（筆者自身も含む）にフィードバックの上、加筆・修正した。

3) 分析

2) の加筆修正したデータから「働くことに関わる」教育内容を取り出し、教育内容の意味に沿って分析を進め、その過程では必要に応じて教育上の意図を確認した。分析がある程度進んだ段階で「働くことに関わる」教育という視点で全体を見直し4つに大きく分け（大項目）、大項目ごとに意味の類似性によって小項目、中項目をまとめ表題をつけた。内容と時期を照らし合わせ全体の組み立てを確認した。

2. 他の看護系大学教員との意見交換

1) 対象

働くという営みを含めた社会的存在としての人間を理解し援助するという面での看護学領域の一つとして産業看護学を担当する教員（B氏）、自らが看護専門職として働くことをマネジメントするという面での看護学領域の一つとして看護教育学を担当する教員（D氏）、看護学士課程教育全体から検討するという点から看護学科のカリキュラム作成に責任者として携わった経験のある教員（C氏）の計3人を対象とした。所属大学はいずれも異なり全員教授職であった。

2) 意見交換の方法

意見交換は個別に実施した。筆者からA大学の教育課程の概要を紹介した上で研究計画書に基づき研究の全体構想を説明し、方法1の結果である「働くことに関わる」教育の内容・時期を提示した。提示内容に関する質疑応答や先方の大学における「働くことに関わる」教育状況の確認をしつつ、話の流れに応じて筆者から「働くことに関わる」教育の中核となる内容、学習の進展などのテーマを示し意見交換を行った。なお、C氏は意見交換の数ヶ月前に所属大学を異動したため、前任校での経験に基づき意見を述べてもらった。意見交換の内容は先方の了解を得てメモか録音により記録した。

3) 分析

意見交換の内容の記録から①「働くことに関わる」教育の内容・時期に対する意見、②「働くことに関わる」教育についての考えが述べられている部分を抽出し整理した。抽出した①②は、話しているテーマ（以下、『』で示す）に沿って整理し対象者ごとに発言内容の概要としてまとめた。発言内容の概要を各対象者にフィードバックし確認を求め指摘に応じて加筆修正を行った。

3. データ収集期間

平成19年3月～平成20年9月。

III. 本研究における働くことに関する言葉について

人にとって働くことの本来の性質は、生きるために必要な基本的衣食住を直接的にも間接的にも得ることにあ
る。しかしながら、そのみですべてを表現し得るもの
ではなく、働くことは、生きがいを得る、あるいは成長
発達につながるという価値のある営みである。どのよう

な側面から、働くことをとらえていくか、そのことそのものが看護学士課程における「働くことに関わる」教育の充実に向けて必要な作業であろうと考える。したがって、本研究では、働くことについて、経済性の有無、種類・性質等の細かい条件設定は行わない。論文中では、「働くこと」と「仕事」「労働」という言葉は基本的に同義として扱った。研究課題にある“働くこと”という言葉で十分な表現が可能などときには原則としてその言葉を用いたが、文脈の中で日本語表現として使用しづらい場合には、必要に応じて他の言葉を選択した。

IV. 倫理的配慮

研究協力を依頼する際には、研究の目的・主旨および匿名性の確保、情報の管理と破棄について十分に説明し、協力を断っても不利益は生じないこと、同意の後に協力を取り消すことができることを保証した。各対象者に文書に基づき上記を説明し書面にて了解を得た。

本研究課題は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会より承認を受けた（通知番号19-A012-3）。

V. 結果

1. 看護学士課程における「働くことに関わる」教育の現状把握

1) 対象となった看護大学の教育課程の特徴

A大学の教育課程の特徴として、家庭や地域に生活の基盤を持つ人々への看護援助の方法を学習の中核に据え、看護学の学習科目を大きく4領域（地域基礎看護学、機能看護学、育成期看護学、成熟期看護学）に分け、そのうち展開的学習科目はライフサイクルで区分した2領域で構成していることがあった。4年間の学習のプロセスは、1年次から専門科目、専門関連科目、教養基礎科目を必修で学び、高学年次においては5・6セメスターで領域別実習があり、その後教養選択科目および卒業研究に取り組む。7・8セメスターの卒業研究では、学生自身が選択した看護学領域で主体的に看護実践を試み、これをもとに研究報告をまとめる。教員は4つの看護学の各領域に、医療機関など主として施設内で展開する看護を担当する臨床系の教員と市町村・在宅・学校・産業の場などで展開する看護を担当する保健系の教員の双方が関与

し、教育を行っていた。また、1つの科目を複数の教員がオムニバス形式および共同で授業展開していることが多かった。

2) 「働くことに関わる」教育の内容

教員へのインタビューから把握した教育内容は、4つの大項目（以下【 】で示す）、17の中項目（以下《 》で示す）、37の小項目（以下〈 〉で示す）に分けられた（表1～表2）。

【人間にとって働くことの意味】は3つの中項目を含み、ライフサイクル、社会、自己実現という側面から意味をとらえていた（表1）。働くことの側面のひとつである経済的報酬について、《社会生活への適応・社会との接点》の小項目〈働くことによる（経済的）自立と安定した生活の確保〉では、「労働して対価を得ること・職を得て自立することの社会的意義」という教育例があったが、《自己実現につながる営み》の中の〈働くことに伴う役割・責任・義務〉では、経済的報酬はなくても人のために役に立つことも働くことであると教育していた。

【ケア対象者の健康との関連からみた働くこと】には4つの中項目が含まれ、健康との関連を本人、家族という側面からとらえるとともに、支援する制度・仕組み、生活の営みという側面からも取り上げていた（表1）。

【ケア対象者の抱える健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法】は、6つの中項目から構成され、様々な健康課題・健康障害に応じた働くことに関する支援の必要性と方法を教育していた（表2）。

【看護専門職として働くこと】は、看護職者として自らが働くことに焦点が当たり、《看護職者としての成長》《専門職者としての役割・責任・義務》《専門職者としての社会貢献》《看護職者としてのセルフマネジメント》の4つの中項目から構成されていた（表2）。

3) 「働くことに関わる」教育の内容と時期

教育内容と時期を照合すると、【人間にとって働くことの意味】は1～2セメスターでそのほとんどが取り扱われていたが、《自己実現につながる営み》の〈自尊心と働くことの関係〉は4セメスターおよび領域別実習中の5・6セメスターで学習していた（表3）。【ケア対象者の健康との関連からみた働くこと】は主として前半セメスターで教育していたが、《生活の営みにおける働くこと》は後半にも教育が行われていた。【ケア対象者の健康課

表1 教育内容・要約例（その1）

教育内容	教育内容の要約例
人間にとって働くことの意味 ライフサイクルにおける位置づけ 次世代育成と働くこと 青壮年期における働くこと 老年期における働くこと 生涯発達からみた働くこと ジェンダーと働くこと	父親の育児参加が求められている背景、育児が困難になっている現在の社会的な背景として、個に帰着するのではなく、社会のシステムの中に人間が置かれていて、働く場での気兼ねがあるのではないかと、働いているということに関わりたくても関われないということなどがある 青年期・壮年期の働いている期間の健康と仕事の相互関係 定年退職後の第2の人生において働きたいという意欲を持って労働も含めて健康的に生活する 人生の背景、発達には、働いていることが、影響している 結婚したら働くことを続けるかどうかという質問を女性にはして男性にはしない、それは文化社会的背景、ジェンダーの規範によるものではないかということ
----- 社会生活への適応・社会との接点 働くことによる（経済的）自立と安定した生活の確保 社会の変遷に伴う働き方の変化とその影響 働くことによる社会への貢献と社会からの還元 現代社会における労働の実状 心理・社会的側面のひとつである働くこと 自己実現につながる営み	労働して対価を得ること・職を得て自立することの社会的意義 高度経済成長期に社会情勢の変化と共に働き方が変わり家庭のあり方も変わってきたこと 社会の中心として責任を持って働くことの意味 男女の働き方の違い、労働時間、雇用形態などの日本および諸外国の現状 地域で生活する精神疾患患者の社会との接点として、働くことがあること
----- 働くことに伴う役割・責任・義務 自尊心と働くことの関係	経済的報酬を得るという側面だけでなく人のために役立つことも広い意味では働くことであり、家族から認められ、構成員としての役割を果たすことができるように援助することは自己実現につながる 高齢者にとって、仕事をしてきたことが、その人にとって重要で価値があり、自尊心の核となっている
ケア対象者の健康との関連からみた働くこと 働くことと健康の関連 健康問題による働くことへの影響 労働環境・労働態様に関連する健康障害 働くことと健康の維持増進	一生懸命働いていたが、配属替えをきっかけにやる気を喪失し、うつ病になり仕事を休まざるを得なかった人の気持ちを理解する VDT作業による健康影響（視機能・筋骨格系・精神神経系）や作業環境・作業態様による健康障害を予防する対策のひとつとして保護具着用がある 働くことと心の健康の関連は非常に深く、心の健康づくりには仕事との関連を理解することが重要である
----- 働くことと家族の健康生活の関連 家族の担う介護役割・負担 家族内の関係性	老化によりセルフケアが十分にできなくなり介護が必要になることは、家族である介護者にとって家庭内の新たな役割の拡大につながる 家族の中心人物が病気になり同居家族が家業を継いで行くことになったときに働くということにどのようにコミットしていくのかということ
----- 働くことを支援する制度・仕組み 次世代育成対策 障害者の就労支援 産業保健体制（労働衛生管理体制）	子どもが置かれている状況や、父親や母親がどんなことに困りながら、課題を持ちながら、働き、子育てをし、家事をしているかという現状に対し、どのようなサービスが提供されているかということ 身体障害により働けない、あるいは働くことにより十分な収入が得られない場合に活用できる、身体障害者に対する社会制度について理解する 職業病、作業関連疾患等の2次予防として行われる特殊健康診断
----- 生活の営みにおける働くこと 働くことを含めた生活および生活歴の多様な側面の理解とアセスメント コミュニティの一つとしての職場	対象をアセスメントする項目として職業があること。心理社会的要素として働くことをとらえアセスメントする 労働の場というコミュニティの特徴を理解する必要性

表2 教育内容・要約例（その2）

教育内容	教育内容の要約例
ケア対象者の抱える健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法 受診・治療過程における働くことに関わる支援 働きながら受診すること・治療を継続することの難しさと支援	働く人たちが病気になり手術を受けるときには、それまでに、会社の仕事との調整、壮年期であれば、家庭の中の調整、家族が入院したときの調整など、非常に多様な調整が必要になる
健康問題・健康障害を抱える人の就労・復職への支援 慢性的な健康障害を持ちながら働くことの難しさと支援 健康障害からの回復過程と働くことへの適応への支援 永続的障害を持ちながら働くことの難しさと支援 妊娠・出産の経過における働くことへの適応の支援 退職後の支援	ストマを持って働くことの大変さを理解し、社会資源を活用して円滑な社会復帰を援助する 精神疾患の回復過程で、患者は退院したら元に戻ったように感じ、いろいろなことを引き受けたり多すぎる仕事をするにより再発してしまうことがある 復職への支援では、生活が維持できるほどの収入を得られる仕事ができるようにサポートするとともに、障害があることによる自尊心への影響を重視して援助する 妊娠期の身体的・精神的負荷の一つとして仕事の状況をとらえ、職場の理解を得て仕事の調整をはかるように支援する 精神疾患の壮年期男性の場合、退職後のその人の存在価値、その後の生活を援助する
療養生活における働くことに関わる支援 経済的に安定した療養生活を送るための支援 家族の労働生活への影響を考慮した支援	訪問看護の対象者本人の過去の職業を把握することによって年金額のおおよその水準を知り家計の経済的基盤を把握する 家業の様子などをかなり詳しくとらえ家族の就労状況を踏まえ、具体的看護方法を提案する
安全で健康に働くことの支援 働くことに起因する健康障害を予防する活動 労働の場における集団的・個別的看護活動 働くことと健康の維持増進を支える活動	労働環境・労働態様に起因する健康障害の防止のためには組織的取り組みが必要であり、組織を活用して看護をすることが重要である 働く人々を対象とした健康維持・増進活動は個別的支援・集団的支援の双方が関連して発展していく 働く人が労働生活や家庭生活と調和させながらライフスタイルを自ら改善し健康を維持増進していくための援助
ライフサイクルの変化に応じた働き方の支援 更年期の心身の変化に応じた働き方の支援 次世代育成と調和した働き方の支援 思春期における働くことへの準備の支援	更年期の女性は、仕事上の責任が重くなり、重要な立場に立つ時期にもあり、更年期の体調の変化、症状により辛い思いをしたり家庭との調整に苦しみことがある 働いている父親の健康を守るときに、子どもがセルフケア能力を取得して知識を持ち、それが家族の中で共有され、子どもからの働きかけで父親自身が健康を守っていくように仕組んでいくという、子どもが子どもなりに持つ力と、家族の中での役割、父親の父親であるという意識を高め、引き出して、それがその人自身の健康を改善していくための、ひとつの働きかけのツールである 慢性疾患を持つ思春期の対象の心理的な大きな揺れをとらえ、社会に巣立っていく中での集団生活の場でのコントロールを支援する
QWLの向上をめざす支援 QWLの向上をめざす支援のあり方	成熟期の働く人のQOLの中で重要な位置を占めるQWLの向上を目的とする看護のあり方
看護専門職として働くこと 看護職者としての成長 専門職者としての役割・責任・義務 専門職者としての社会貢献 看護職者としてのセルフマネジメント	成人として責任を持ち、自律した人間として自分自身を成長させていくことの意味 看護職者自身に焦点をあて、看護職者の問題として取り上げ改善・改革する よい看護を提供するための組織・チームの発展への個人の貢献の意味 看護は感情労働であり、もともと人に尽くす性格で、自分自身に焦点を当てたり自分を表現しない人が看護師になると、自分の感覚を否認してしまうバーンアウトしてしまう

表3 教育内容と教育時期

教育内容			セメスター								
			1	2	3	4	5	6	7	8	
人間にとって働くことの意味											
ライフサイクルにおける位置づけ	次世代育成と働くこと	●									
	青壮年期における働くこと	●									
	老年期における働くこと	●									
	生涯発達からみた働くこと	●									
	ジェンダーと働くこと		●								
社会生活への適応・社会との接点	働くことによる（経済的）自立と安定した生活の確保	●									
	社会の変遷に伴う働き方の変化とその影響	●	●								
	働くことによる社会への貢献と社会からの還元				●						
	現代社会における労働の実状		●								
	心理・社会的側面のひとつである働くこと	●		●							
自己実現につながる営み	働くことに伴う役割・責任・義務	●									
	自尊心と働くことの関係				●	●	●				
ケア対象者の健康との関連からみた働くこと											
働くことと健康の関連	健康問題による働くことへの影響		●								
	労働環境・労働態様に関連する健康障害	●	●	●							
	働くことと健康の維持増進				●						
働くことと家族の健康生活の関連	家族の担う介護役割・負担	●			●						
	家族内の関係性			●							
働くことを支援する制度・仕組み	次世代育成対策	●		●	●						
	障害者の就労支援		●	●							
	産業保健体制（労働衛生管理体制）		●								
生活の営みにおける働くこと	「働くこと」を含めた生活および生活歴の多様な側面の理解とアセスメント		●		●	●	●	●	●	●	●
	コミュニティの一つとしての職場			●		●	●	●	●	●	●
ケア対象者の抱える健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性和方法											
受診・治療過程における働くことに関わる支援	働きながら受診すること・治療を継続することの難しさと支援		●	●	●			●	●		
	健康問題・健康障害を抱える人の就労・復職への支援			●	●	●	●	●	●	●	●
	健康障害からの回復過程と働くことへの適応への支援		●			●	●	●	●	●	●
	永続的障害を持ちながら働くことの難しさと支援			●	●	●	●				
	妊娠・出産の経過における働くことへの適応の支援			●	●						
	退職後の支援							●	●		
	療養生活における働くことに関わる支援	経済的に安定した療養生活を送るための支援			●						
安全で健康に働くことの支援	家族の労働生活への影響を考慮した支援			●	●			●	●		
	働くことに起因する健康障害を予防する活動		●								
	労働の場における集団的・個別的看護活動	●	●	●		●	●	●	●	●	●
ライフサイクルの変化に応じた働き方の支援	働くことと健康の維持増進を支える活動		●			●	●	●	●	●	●
	更年期の心身の変化に応じた働き方の支援		●								
	次世代育成と調和した働き方の支援			●							
QWLの向上をめざす支援	思春期における働くことへの準備の支援				●						
	QWLの向上をめざす支援のあり方		●								
看護専門職として働くこと											
看護職者としての成長	看護職者としての成長	●			●						
	専門職者としての役割・責任・義務			●				●	●		
専門職者としての社会貢献	専門職者としての社会貢献							●			
	看護職者としてのセルフマネジメント		●								

* ●印が教育実施セメスターを示す

題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法】は、2セメスター以降の授業の中で教育が行われ、領域別実習が行われる5・6セメスター、総合的な実習（卒業研究）が行われる7・8セメスターの高学年次においても学習が進められていた。【看護専門職として働くこと】は1セメスターから8セメスターまで順次教育が進められていた。

2. 他の看護系大学教員との意見交換

1) 「働くことに関わる」教育の内容・時期に対する意見
『学習の順序性』について、B氏から「現状把握の結果からは、働くことの意味からアセスメント、援助というつながりになっており漠然とはイメージに合っている」との発言があった。

『対象が働くことを援助することと看護専門職として働くことの双方の教育の必要性』について、B氏、C氏が必要があると述べた。

『「働くことに関わる」教育の中核となる内容』については、看護大学が専門職業人の教育機関であることから、D氏は「看護職者として育てることにすべての方向が向いている」と述べ、B氏からは「学生に働くことを意識付け、成長につなげていかなくてはならない。自らが看護専門職として働くことをマネジメントできるように育てることにより卒業後の適応はよくなるのではないかと考える。職業病等に限らず、広い意味で働くことによっておこる健康障害を理解していないと、健康障害を持ち復職しても再発する危険性があることや、働く人の生活習慣は労働生活習慣であるというライフスタイルとの関係をとらえる事が出来ない」その中でも「労働は誰でもがしなければならないことであり権利でもある。予防的な意味で働くことと健康の関連を理解することが重要である。働くことを継続できるコミュニティ、働くことで健康を害することのないようコミュニティがフォローすることが求められ、働くことを支える制度・しくみを教育することは重要である」と述べた。

『教員の構成と教育内容の関係』について、B氏は「教員の構成として保健系と臨床系の教員が各領域に入ることによって生活をとらえられる教育になっているのではないかと感じる」とA大学の教員構成とつなげて述べ、「他大学

においても臨床系の教員がもっと広く対象をとらえ生活背景も含めて教育をしていくと、学生も集団をとらえることができるようになるのではないかと」の考えを示した。

『教育内容』に関する意見は下記の通りであった。【人間にとって働くことの意味】について、C氏は「働くことの価値を教育しているのだと思う。示されている内容はよくわかり、このような内容でいいのではないかとと思われる」、B氏は「看護学に限らず扱われる内容だと思う」「【看護専門職として働くこと】の教育内容は、【人間にとって働くことの意味】の理解ととても関係が深いのではないかとと思われる」と述べた。教育内容と時期に関し、C氏は「看護専門職として働くことについて、領域別実習では学生は看護の現場に出ており働いている人を見ているのに、看護職としての成長や、役割・責任・義務など、セルフマネジメント的な部分がどこにも入っていないことは不思議である。教員からの聞き取りの結果がこのようになっているということは、教員がそのことを強く意識していないからではないか」と教員の意識について述べた。

また、「統合カリキュラムとして看護師教育と保健師教育が同時に行われているが、この提示された教育内容では、働く人という集団をどのようにとらえ理解しているのかわかりづらいのではないかと」(B氏)、「働くということが、どういうところでどういう構成要素で成り立っているのかということを理解するには、働いている場がわからなければならない」と(C氏)、「【ケア対象者の健康との関連からみた働くこと】で示されている内容は、働くことと地域生活あるいはコミュニティ（家族、地域、職場など）についての内容ではないかと思う。ケア対象者という表現が、個人に限定している印象を与えていると思われる」と(C氏)という意見があった。

2) 「働くことに関わる」教育についての考えとして述べられた意見

『働くことの具体的なイメージ化の難しさと卒業後の適応』について、B氏は「ほとんどの学生は自分が働いたことがなく、親が働いている姿を見ながら育つことも少なく、働くことのイメージ化ができていない学生が多いような気がしている。働くことのイメージ化ができるように教育していくことにより、ケア対象者が働くことを

理解するのみではなく、自らも働くことに適応できるようになると思う」と述べた。

『働くことについての高校までの教育の不足、働くことの厳しさ』について、D氏は「人として物心ついて、大きくなったら何になるという段階から、働きながら生きる存在としての学びがはじまっている。この学びは小学校、中学校、高校においても一貫して続けられるべきものである。受験準備で、働くことの学びが中断しがちであり、このため、大学では、人として働きながら生きていくという基本的なあり方をしっかり認識するところからはじめなければならない。(中略)働くということは多少つらいことがあっても、生活がかかっているという思いがはたらく。そのような働くことの厳しさは、看護でなくても学んでいかなければいけないことである」と述べた。

『専門職業人として働くことの教育』について、D氏は「専門職業人教育という点では、学士課程では、カリキュラムを専門職自らが主体的に決定して国家試験受験資格を与えることになる。国家資格があつて初めて社会的に、普通だったら許されないような医療的な処置等を行うことが許される職業である。そして人の役に立つということが強いモチベーションになっている。自分で判断を下し、新しい知識が必要であれば自分で獲得していくという生涯学習も必要になってくる。その仕事にかなりコミットして、打ち込んでいくということになり、同資格を持つ者は、専門資格を持つ者として互いに尊重しあい、専門的知識を求めて協働していく。高い倫理性を求められるという厳しいものである。ここは、やはり基礎教育で教育すべきことだと思う」と述べた。

VI. 考察

1. 「働くことに関わる」教育の内容・方法

教育内容の4つの大項目は、看護学士課程において教育している働くことの多様な側面を示していると考えられる。中核的内容は【看護専門職として働くこと】であるとの意見と【ケア対象者の健康との関連からみた働くこと】という意見があったが、各々の意見には納得できる理由があり教育の中核的内容を設定するというよりもこの4つの教育内容の大項目それぞれが必須なものと考えられることが適切であると考えられる。

【人間にとって働くことの意味】は、看護学に限らず扱われる内容だと思う、初等教育から一貫して続けられるべきものであるとの意見があり基本的な概念として働くことを教育する必要性が示された。Roperら(2000)は、「働くこと」という活動は多くの側面をもち、本質に関する議論は必然的に報酬を伴う雇用に焦点を当てることになるが、その言葉にはより広い解釈があることを忘れるべきではないと述べている。働くことの多様な側面を理解し、対象が働くことであると意味付けている行為を広範囲にとらえられるように教育することが重要であると考えられる。

【ケア対象者の健康との関連からみた働くこと】については、コミュニティによるフォローの必要性という面から働くことを支える制度・しくみを教育する重要性の指摘があり、提示した教育内容では働く人という集団の理解がわかりづらい、生活背景も含めて教育をしていくと学生も集団をとらえることができるようになるのではないかと考えが示された。働くという営みは、基本的に個人で完結する営みではなく、他者やコミュニティとの関係があつて成立するものであり、働く人という集団をとらえる視点の育成を充実させていくことは必要不可欠であると言えよう。関連して「ケア対象者の」という表現は個人に限定したイメージになりやすいとの指摘があり、以後は大項目の表題の表現から削除する。

【人間にとって働くことの意味】には働くことに伴う役割・責任・義務があり、【看護専門職として働くこと】には《専門職者としての役割・責任・義務》があるという関連が認められた。同様に【人間にとって働くことの意味】には働くことによる社会への貢献と社会からの還元があり、【看護専門職として働くこと】には《専門職者としての社会貢献》がある。【看護専門職として働くこと】の内容は【人間にとって働くことの意味】の理解と関係が深いという他大学教員からの指摘もあった。さらに専門職業人教育という点では、働くこと一般と比し、国家資格の重み、強いモチベーション、生涯学習、高い倫理性を求められるという意見から、人として働くことについての教育を基盤に看護専門職として働くことへの教育が行われる必要性があると考えられた。矢吹(2008)は、就労支援施設での実習で、学生は「自己を振り返り、学生自身の持つ偏見や先入観に気づき、社会

人になろうとする自分の姿勢をも内観していると考えられた」と述べている。働く営みに接することで自分自身が働くことへの思いが至るということは、様々な学習場面で可能であり積み重ねによって理解が深まることは期待してよいと考える。教員は、実習等は「働くことに関わる」看護ケアニーズをとらえ援助することと、自らが看護専門職者として働くことをマネジメントすることを学ぶ両方の機会であることを意識して指導することが重要と思われる。

【人間にとって働くことの意味】【健康との関連からみた働くこと】【健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法】という順序性で学習は進み、【看護専門職として働くこと】は【人間にとって働くことの意味】と並行して開始している。【健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法】は、実習においてさらに学習を深めているものと考えられる。

2. 「働くことに関わる」教育の基盤となる考え方

「働くことに関わる」教育の基盤となる考え方を下記の通り整理した。

看護学士課程における「働くことに関わる」教育の柱は、【人間にとって働くことの意味】【健康との関連からみた働くこと】【健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法】【看護専門職として働くこと】である。4つの教育の柱が学習の進展とともに関連し深化すること、【人間にとって働くことの意味】を基本に【健康との関連からみた働くこと】【健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法】という順序性で学習は進み、並行して【看護専門職として働くこと】の学習も進むことが重要である。

教育内容については、働くことをコミュニティ、社会という集団の面からも支えるという点から、働くことを支える制度・しくみについての教育を重視する。方法については働くことの具体的なイメージをもつことができる、働く場を理解する、卒業後に看護専門職として働くことへの適応を促進する、以上を意図して工夫する。

【人間にとって働くことの意味】は、看護専門科目以外の科目においても教育が行われる。

学生が対象の働くことの意味を理解し「働くことに関わる」看護ケアニーズをとらえ援助することと、看護専門職として働くことを連動して学べることが重要であり、

教員には働くという概念を基本にこれらを統合できるように支援する役割がある。

なお、今回は筆者の所属する大学の教育のみを素材としたが、各看護系大学教員と所属大学における教育担当者の立場での具体的な状況に基づいた意見交換を行うことができ、基盤となる考え方を検討する目的に対して有効であったと言える。ただし、今回の「働くことに関わる」教育の基盤となる考え方の検討は、教育の現状と大学教員との意見交換から行っており教育を担当する側からのものである。今後は、ケア対象者の「働くことに関わる」看護ケアニーズ、卒業生の「働くことに関わる」看護実践やマネジメントの現状も明らかにし、卒業時到達レベルを考慮しながら教育方法を吟味し、内容の体系化を検討し、「働くことに関わる」教育のあり方と意義を提言していくことが重要である。

VII. 結論

ある看護学士課程における「働くことに関わる」教育の現状について教員からの聞き取りにより把握し、その結果を素材に看護系大学教員との意見交換を行った。これらを通じて「働くことに関わる」教育の基盤となる考え方が、下記の通り整理された。

1. 「働くことに関わる」教育は、【人間にとって働くことの意味】【健康との関連からみた働くこと】【健康課題・健康障害と働くことに関する支援の必要性と方法】【看護専門職として働くこと】から構成され、学習の進展とともに各内容が関連して深化する。
2. 教育内容・方法として、働くことを支える制度・しくみについての教育の重視、働くことのイメージ化ができる、働く場を理解する、卒業後の看護専門職として働くことへの適応を促進する、以上を意図した教育方法の工夫を行う。
3. 【人間にとって働くことの意味】は、看護専門科目以外の科目においても教育が行われる。
4. 教育においては、学生が対象の働くことの意味を理解し「働くことに関わる」看護ケアニーズをとらえ援助することと、看護専門職として働くことを連動して学べることが重要であり、教員には働くという概念を基本にこれらを統合できるように支援する役割がある。

なお、本論文は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科における平成20年度博士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。また、平成20年度、平成21年度の日本看護学教育学会にて一部を発表した。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様、ご指導いただきました岐阜県立看護大学大学院看護学研究科の先生方に深く感謝いたします。

文献

- 藤原秀子, 清水聡子, 馬場公子. (2008). 成人看護学概論のフィールドワークにおける学生の到達～フィールドワーク後の成人観を分析して～. 近畿高等看護専門学校紀要, 8, 36-38.
- 福岡悦子, 逸見英枝. (2008). 保健師教育(1年課程)における産業保健実習の学びと課題. 日本看護学会論文集地域看護, 224-226.
- 後藤由紀, 高橋悦子, 岡部充代, ほか. (2008). 新入学生の産業看護理解の変化 1.5時間の講義をうけて. 四日市看護医療大学紀要, 1(1), 61-66.
- 逸見英枝. (2009). 看護学生が捉えた成人期にある人の健康問題からの対象理解—ハヴィガーストの発達課題を生活課題に変えて—. 新見公立短期大学紀要, 30, 45-53.
- 鎌田久美子. (2012). 平成23年度地域保健総合推進事業 保健師教育課程における新カリキュラムに対応した臨地実習内容ならびに体制のあり方に関する調査研究報告書. 2013-8-29. http://www.nacphn.jp/dl_file/cyousa-houkokuH23-kamata.pdf
- 小稗文子, 石井範子, 佐々木真紀子. (2008). 看護基礎教育課程における職業性曝露に関する教育の実態. 日本看護学教育学会誌, 18(1), 11-18.
- 宮脇美保子, 寺岡三左子, 小元まき子. (2008). 4年制大学における看護学生の職業的社会化—3年次の臨地実習における体験に焦点を当てて(第3報). 順天堂医療看護学部医療看護研究, 4, 57-63.
- 岡本寿子, 植村小夜子, 村上静子. (2005). 看護職イメージの形成. 京都市立看護短期大学紀要, 30, 75-79.
- Roper, N., Logan, W., Tierney, A. J. (2000). The Roper-Logan-Tierney Model of Nursing-Based on Activities of Living(pp.41-42). Churchill Livingstone.
- 佐居由美, 松谷美和子, 平林優子, ほか. (2007). 新卒看護師の

- リアリティショックの構造と教育プログラムのありかた. 聖路加看護学会誌, 11(1), 100-108.
- 社団法人日本看護協会中央ナースセンター. (2006). 2005年新卒看護職員の入職後早期離職防止対策報告書, 17-18.
- 土屋知枝. (2007). 看護基礎教育における抗がん剤曝露に関する教育の現状. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究, 32, 101-108.
- 上野美智子, 梅津美香, 奥井幸子. (2002). 産業看護学教育の構築 第1報—学生による働く人の仕事と健康の関連に関するインタビューの分析—. 岐阜県立看護大学紀要, 2(1), 124-130.
- 上平公子, 堀希好, 橋本廣子, ほか. (2013). 産業保健実習の成果に関する検討～製造現場からの学び～. 岐阜医療科学大学紀要, 7, 53-61.
- 梅津美香, 堀井直子, 小林美代子. (2005). 医療機関における復職支援に関する看護職の認識(第一報). 第25回日本看護科学学会学術集会講演集, 304.
- 梅津美香, 北村直子, 奥村美奈子, ほか. (2007). 「労働の場における看護」(産業看護)実習を通しての学生の学び(第2報)—効果的指導の実現に向けて—. 岐阜県立看護大学紀要, 7(2), 25-32.
- 梅津美香, 小林美代子, 堀井直子. (2002). 職業を持つ患者の復職に関する体験. 第22回日本看護科学学会学術集会講演集, 330.
- 矢吹明子. (2008). 精神看護学実習における精神障害者の就労支援のための施設での学び. 京都市立看護短期大学紀要, 33, 83-93.
- 山内栄子, 松本葉子, 山本雅子. (2009). 現代の看護系大学生の学生生活における職業的アイデンティティの形成過程. 日本看護学教育学会誌, 18(3), 11-23.
- 吉田広美, 安斎三枝子. (2006). 看護過程のアセスメント能力に関する教育課題(1)—基礎看護学実習(2年次)の看護問題リストの分析から—. 京都市立看護短期大学紀要, 31, 125-132.

(受稿日 平成25年 9月 2日)

(採用日 平成26年 1月15日)

A Study on Fundamental Concepts of Nursing Education Focusing on Working; Through the Current Situation of a Bachelor's Program in Nursing and Exchange of Opinions

Mika Umezu

Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

Abstract

This study was carried out for improving “nursing education focusing on working” in the bachelor's course in nursing by clarifying the current situation of such education through interview on the faculty staff of a nursing college and using the results thereof for examining its fundamental concept through exchange of opinions with faculty staffs of another nursing college.

An interview session was conducted on 14 faculty staff members of College of Nursing A to gather information on the current situation of “nursing education focusing on working” and the results were sorted out for the contents, periods, and methods of such education. Based on those results, opinions were exchanged with three professors of other nursing colleges.

The “education focusing on working” was composed of by four elements of “the meaning of working for human being”, “the relation between health and work”, “the necessity and methods of support for health issues/problems and working”, and “working as a nursing professional”. The professors of the nursing universities pointed out that the necessity of teaching nurses how to support the care recipients to stay on the job and how to work as a nursing professional as well as the education on “the meaning of working for human being” are universal subjects not limited to the nursing course.

Based on the above results, fundamental concepts of nursing education focusing on working were sorted out as follows:

1. Nursing “education focusing on working” consists of “the meaning of working for human being”, “the relation between health and work”, “the necessity and methods of support for health issues/problems and working”, and “working as a nursing professional” and as the study progresses each of these elements are increasingly co-related to one another.
2. The education contents and methods are to be devised while taking into consideration an educational focus on institutional systems and schemes that support working, visualization of working, understanding on place of work, and promoting adaptability for working as a nursing professional after graduation.
3. “The meaning of working for human being” is not to be limited to a nursing course but to be included in the curriculum of other courses.
4. In the educational scenes, it is important for students to learn both, in conjunction with each other, to understand the meaning of working with a view to supporting the nursing care needs of “focusing on working,” and to work as a nursing professional, and the faculty staff has the obligation to help the students to integrate both factors on the fundamental concept of working.

Keywords: working, education, bachelor's course in nursing